

に、横山山城家士十七人、大坂夏陣軍功有之に付、賞譽衣銀を公より賜ふと載せられたり、四人洩れたり。其四人は杉采女・竹田金右衛門・毛利助右衛門・辰巳隼人は也。其賞品は杉采女は銀二枚・御帷子二つ、竹田金右衛門は銀三枚・御帷子三つ也。竹田金右衛門は竹田市三郎の父なり。といへり。武家耳底記に云ふ。竹田市三郎の父は金右衛門と云ふ越後浪人も。後に横山大膳に仕へ、三百石を領す。實子なく、大場氏の庶子を養うて子とす。是市三郎也。器量能きに付、微妙公被召出寵臣となる。右金右衛門金澤へ来る首尾は、或年藩士佐久間甚八郎が先祖某、江戸より御使の歸るとき、津幡驛にてさもおちぶれたる浪人、佐久間に立向ひて金澤へ被召連歩の者にて被召仕給り候へと頼む。行衛も不知者なれば、佐久間も不肯して、我が身も小身の者なれば、扶持を當る事もしがたし。然共金澤へ被參候はゞ宅をも被尋候へと、能き程に挨拶をし立別れしに、浪人獨言を言うて山入の方へ行きぬ。佐久間家來に何事をか言ひつると尋ねれば、いづくの土と成るも前世の定りとて、山の方へ参りしといふ。佐久間聞きて、あな不便や、自害

にてもせんずると思ふにこそ。呼辰せよとて、金澤へ同道し、私宅に指し置ぬ。此浪人翌日より未明に起きて、云付くる者もなきに、内外の掃除も、馬の湯洗、鐵炮をみがくなど、如形利口重寶也。佐久間小身なる故に、此まゝ抱え置かんも不便也とて、山田八右衛門は四千石にて足輕大將なれば、八右衛門にかうくの者あり。試に被召仕まじきやと云ふ。八右衛門同心し、他國浪人尙以て面白しとて召抱えけるに、云ひしに違はず利發者なれば、段々取立て二百石與へぬ。様子有りて八右衛門御暇申、金澤を立退きけり。其砌横山大膳へ、右之人品申立、置みやげにせしとぞ。今按するに、前顯武功書に、大聖寺城攻の時、牢人にて御陣に罷在、其後山田八右衛門所に在之と記載すれば、佐久間方に寓居せしは慶長五年頃にて、金澤へ來りたるも同時ならんか。さて慶長十九年大坂冬陣の頃は、本多安房守方に居、翌元和元年大坂夏陣前横山大膳方へ抱えられし事、彼の武功書にて知られけり。加陽諸士系譜に、竹田氏元祖市三郎忠次、横山山城守家士竹田金右衛門入道休意の養子也。寛永五年微妙公被召出爲寵臣被取立、三千五百三十

石賜之。萬治元年殉死。と見ゆ、國事昌披問答に、竹田市

三郎忠次は、寛永五年利常卿子小姓に被召出、御意に應じ御取立有之。養父は竹田金右衛門、實父は大場采女と云ふ。金右衛門は横山山城守の家人、大場采女は村井兵部の家人なりといへり。竹田市三郎が傳は長町の部に記載す。

○横山氏家士長谷川五右衛門傳

元和武功書に云ふ。百五十石長谷川五右衛門。生國越前。堀江中務大輔代々の者也。加賀國月林之城攻の時、首一つ討取。篠原出羽守殿内乙部重兵衛・平田兵左衛門兩人存知候。篠原出羽守殿所にて小林と申者を仕候。去年大坂にて首三つ討取候。一番に取候は、富田越後殿内坂井金太夫・蜂谷隼人見申候。二番に取候は、千福權助見被申候。三つ目は我等者共見申候。夫より先へ参り、堀田圖書丸へ乘申時、一番に田中八右衛門、二番に我等、三番に松山助右衛門一度に乗り、鎧を合せ、其場にて手柄之儀、伊藤清左衛門・廣瀬宇右衛門存知候。とあり。三州志に、横山山城家士戦功賞譽の時、長谷川五右衛門へ白銀二枚・帷子二つを賜ふ。五右衛門は今の長谷川淳八の祖なりといへり。

○横山氏家士山田九左衛門傳

元和二年武功書に云ふ。二百石山田九左衛門。生國但馬にて、惟任日向守内明智左馬助所に在之。日向守對信長公企謀叛候刻、於本能寺、大手は齋藤内藏助、搦手は明智左馬助兩陣分て攻入時、組討を仕、首一つ討取。同五日安土へ入城、本能寺にて手柄を仕者共へ、判金一枚・二枚・三枚宛行、則我等も三枚賜候。其時之仕合、越前に有之安福助三郎四方田新助・中河縫殿助存知候。其後前野但馬守所に在之、傍輩中と口論を仕出し、打果し可申仕合に候處、其場に在合者共無事に仕、宿々へ罷歸處、彼相手夜に入押懸候に付、無是非罷出、相手之初鎧にて胸板を被突候へ共、終に相手を仕留、罷退候。數多押懸候へ共、手元へ寄付不申候。罷退候其時之仕合、山城守鐵炮之者林作右衛門と申者能存知候。去年大坂にて一番に黒川に着、首二つ討取、富田越後守殿へ懸御目、如御法度鼻をかき捨候へと被仰に付捨候。其場に有合候者共、大膳小姓木船作太夫と申者、山城守内岡本左門・長井平兵衛兩三人之者、能存知候。其後圖書丸へ取込、台所口塀地門を隔て鎧を合候と仕處、鐵炮